

巻 頭 言

副社長

エンジニアリング事業本部長

君 嶋 英 彦



川崎製鉄の歴史は、製鉄所の建設と操業の歴史である。

1951年に戦後最初の一貫製鉄所として千葉製鉄所の建設を開始して以来、諸外国や国内他社から技術を学び協力を得て、このために必要とする技術を吸収し発展させてきた。これら蓄積された技術を社内で利用するだけでなく、社外に役立たせるため1973年にエンジニアリングセンター、その後1976年にエンジニアリング事業部（ED）が発足した。

EDは、製鉄所操業に伴う製鉄技術と臨海製鉄所建設の歴史を通じて蓄積された建設技術を大きな事業の軸として、技術を『売る』立場に立ち、しかも収益を考えた事業体質を求められてきた。EDの発足時にブラジル・ツバロン製鉄所建設、そして同時期にフィリピン・シンター・コーポレーション（PSC）焼結工場の建設がスタートし、この海外でのエンジニアリング活動がその後のED事業の大きな足掛かりとなった。そのことが利用者側の立場に立った設備の改善、個々の技術の総合化、複合化の技術や人材育成、国際的事業のノウハウなどの無形の大きな資産となり、海外でのエンジニアリング事業発展の基礎ができたと言える。

製鉄部門では、タイ、マレーシア、インドネシア、台湾その他における一連の亜鉛めっき、鋼管、ぶりき工場建設で海外でのエンジニアリングで着実に足場を築いてきた。最近では台湾での電炉H形鋼工場、冷延一貫工場、中国宝鋼の製鋼工場建設、欧米における微粉炭吹込み、還流式脱ガスにおける酸素上吹法、連続焼鈍ライン、電気めっきライン、連続溶融亜鉛めっきラインなどの最先端技術供与などにより、さらにビジネスの場を拡大しつつ、技術基盤を整備してきた。今後のインドをも含むアジアを中心とする製鉄プラントマーケットの急激な拡大に対応して、プロジェクトの萌芽期より、設計、機器調達、建設、立ち上げさらには鉄鋼業経営をも含む一貫した総合エンジニアリングが始まりつつある。

また、土建部門では、フィリピンにおけるPSCでのプラント建設と大型シーバース建設が出発点となり、東南アジアにおいて数多くの港湾建設工事をはじめ、水道パイプライン、工業団地開発、鉄道建設などODA案件をも絡む多種多様なエンジニアリング事業を実施してきた。その間、海外プロジェクトはカントリーリスクも多様であり、政治的、経済的環

境の変化，為替変動，複雑化する管理業務など，数多くの難題・課題に直面しつつも，その都度企業としての対応を図り，そのことが反面大きなノウハウとして蓄積されてきている。

国内で大きな設備投資が少なくなった現在我々はこれらの技術を生かし発展させるために今まで以上に海外に力を注いでいる。

今回，最近海外で行なった建設と技術を紹介することとした。これにより我々の考え方の一端を知っていただくとともに，忌憚のないご意見がいただければ幸いと考えている。